

19世紀前半におけるドイツ市民層の 重層化に伴う音楽教養の変化

——ライプツィヒにおける合唱協会の活動内容をめぐって——

三 島 郁

Changing of *Musikbildung* (culture of music) with the Multi-Layered German
Middle Class in the First Half of the Nineteenth Century

——Focusing on the Activities of Choral Societies in Leipzig——

MISHIMA Kaoru

Abstract: In the eighteenth century in Germany, the center of society moved from the aristocracy to the middle class, who came to be owners of property and wanted to be musically cultivated. Leipzig, a merchant city, was not a court city like Berlin or Dresden, but it had a textile industry, a university and publishing business, and the famous *Thomaskirche*. An international trade fair was held twice a year, and there were many foreign visitors to the city. So they had a base for receiving new music culture. The most characteristic feature was the choir. They founded many choral societies for four voices or male voices, where they devoted themselves to singing songs. At first their interest was in religious music or early music repertoires, but gradually shifted to pieces by contemporary composers or by their own members, and they were satisfied with just participating in a *Gesangverein* (choral society). This change in their quality and taste is thought to be closely related to the multi-layered middle-class society.

はじめに：

商業都市ライプツィヒにおける教養市民層

19世紀前半時代のドイツは、貴族社会から市民社会へと移行していた。この新たに社会的勢力となりつつあった市民とはどのような人々を指すのであろうか。1794年の「プロイセン一般ラント法」では、貴族、都市市民、農民という三つの身分が設定されているが、このうち市民は、その生まれによって貴族にも農民にも属さない者すべてを含むとされた¹⁾。市民身分はさらに、「すべての公務員、[…] 学者、芸術家、商人、重要な工場の企業家およびこれらの人々と同等の尊敬を市民社会で受けている者」の「高次」の市民と、中小企業家、手工業者等の「低次」の市民に分けられる。しかし19世紀の市民概念は重層化されてお

り、このように貴族と農民に対置された都市市民に加えて、プロレタリアートに対置された「有産市民」、法の前に平等なすべての「国家市民」、そして貴族とプロレタリアートとの両方に対置された「財産と教養をもった市民的中間層」の異なった三つの意味が付加されていった²⁾。

この教養という語は、18世紀末からドイツで頻繁に使用されるようになった「教養身分」という表現において用いられている。それまで「高級な身分」とは貴族のことであったが、その頃から貴族と市民という出生の身分ではなく、「高級な、教養ある身分」という、教養をもった新たな上層身分という階層が生まれることになった³⁾。18世紀後半以降、音楽活動の中心はまさにこのような身分によって担われるようになった。そして当時の人々によって、教養がとりわけ音楽においてどのようなものとして捉えられていたのか

を、まさに市民層が18～19世紀前半に向けて力を蓄えていった都市の一つ、ライプツィヒの市民の音楽活動を調べることで、探ることができると考えた。

18世紀にベルリンやドレスデンでは、宮廷という場において貴族がイニシアチブをとる音楽文化が栄えていたが、ライプツィヒはそうではなかった。すなわちここでは繊維工業がさかんであり、12世紀にすでに始まっていた年二回の商業見本市が開催されるなど商業都市として発達していた。そして見本市には多くの人々が訪れ、その期間にはそれを見込んで巡回の劇団も公演をするなど、商業都市ならではの、外からの新しい文化を受け入れる土壌はすでに育っていた。また1409年にはザクセン地方最大の規模の大学が創立されており、それにとまって出版業も盛んになっていた。また19世紀になる少し前から、読書協会⁴や美術協会が創立され⁵、『一般音楽新聞 *Allgemeine Musikalische Zeitung*』(以下『AMZ』と略)をはじめとし、次々に創刊された音楽雑誌の総数は、三月前期ではドイツ語圏では最大であった⁶。そこには人々の知識や教養に対する情熱がみてとれる。19世紀半ばの1850年でもライプツィヒの人口は6万3500人ほどで、決して多くはなかったが、商人と知識人に代表される市民が音楽活動においても大きな原動力となって自発的に活躍する基盤をもつこととなり、演奏会が発達し、多くの合唱協会が設立されたのである。

本論では主にこの時期、すなわち1848年の三月革命前の時代 *Vormärz* を中心に、教養を熱望し、音楽へと駆り立てられたライプツィヒの市民が受容した音楽内容、そしてとりわけ彼らが情熱的に取り組んだ合唱協会の活動について分析することにする。その際、F. Schmidt の『*Das Musikleben der bürgerlichen Gesellschaft Leipzigs im Vormärz* (1815-1848) [三月前期におけるライプツィヒの市民社会における音楽生活]』を基礎資料とし、19世紀前半の市民が合唱に関わる上で、その音楽熱がどのような場で生まれ、どのような方向に向かっていったのか、そして彼らにとってその際教養とはどのようなものであったのか、その内実を考察することにする。

1. 教会における宗教曲の演奏

18世紀半ばまでのライプツィヒにおける音楽の中心は、言うまでもなくトーマス教会と付属のトーマス学校であった。1212年から修道院として創始されたトーマス教会は、1254年には後のトーマス学校の母

体となる音楽学校 *Singschule* を併設し、宗教改革の時期になって音楽学校を監督するカントルの組織をもち、それによって付属の少年合唱隊は高いレベルを保つようになっていった。カントルとしては、18世紀においては毎日曜日にカンタータを作曲・演奏していたバッハ *Johann Sebastian Bach* (1685-1750) がよく知られているが⁷、19世紀になっても、シヒト *Johann Gottfried Schicht* (1753-1823, 在 1810-23)、ヴァインリヒ *Theodor Christian Weinlig* (1780-1842, 在 1823-42)、ハウプトマン *Moritz Hauptmann* (1792-1868, 在 1842-68) らトマス・カントルのもとで彼ら自身の作品などとともバッハのモテト、モーツァルト *Wolfgang Amadeus Mozart* (1756-1791)、ハイドン *Joseph Haydn* (1732-1809) の作品が演奏され、『マタイ受難曲 *Matthäuspassion*』(BWV 244, 1728-1729) の再演の舞台ともなった。そこでは礼拝用の音楽と、上述したように見本市期間に「客」を誘う宗教曲の演奏会も開かれ、毎週土曜日の「モテトの夕べ」には地元の人々よりも市外からの人々が多く訪れた。

しかし一方で、テレマン *Georg Philipp Telemann* (1681-1767) が1701年に創始した大学生を中心とするアンサンブル団体のコレギウム・ムシクムが、ノイ教会で定期的な公開演奏会を行っており、それはトーマス教会の演奏会をしのぐ勢いでもあった。テレマンは1704年にライプツィヒを去ったのだが、コレギウムはますます栄え、その後も人数は50～60人を上回り、週2回の演奏会を行なうまでになり、また多くのプロの演奏家を生むほどであった。したがってそれにより、それまで隆盛を極めていたトーマス教会の合唱隊は、以前はコレギウムの学生たちに協力されるほどであったのだが、その状況は逆転してしまった⁸。すなわち教会で音楽の訓練を受けた者が、そうでない有能な素人からその場をおびやかされることになったのである。

2. ゲヴァントハウスの宗教音楽演奏会

トーマス教会が、そのような状況に陥ったのには理由があった。すなわち教会においては集会空間の神聖さ、礼拝と音楽の一体化、限られたレパートリーなどが本来の意味での公開演奏会への発展を妨げていた。しかしその一方でそこは皆が自由に出入りできる空間であり、そこで音楽家と聴衆の出会いがあることから、すでにこの教会での演奏会において、公開演奏会の基礎はできていたともいえる。そしてそのように宗

教曲の演奏が教会の外に出て行くのに伴い、市民が合唱曲の演奏で外に出て行く機会もさらに増えていった。ライブツィヒではその主な場がゲヴァントハウスであった⁹⁾。このゲヴァントハウス演奏会の運営は12人の市民から成る理事会によって行なわれていた¹⁰⁾。その内6人は商人、6人は教養人であったが、20年代半ばになると商人は教養人より優勢になった。1821年と1841年の理事会のメンバーには宮廷裁判官、大学教授、総領事、枢機卿試補、私的教養人兼宮廷顧問官(ロホリッツ)、哲学教授兼宮廷顧問官、商業経営者兼建築士、銀行家、小売商店主、私的なサークルの監督、市長、市議会議員、参事官、弁護士、司教座教会首席、書籍商、楽譜商があり、比較的高い教養層の者から選ばれていた¹¹⁾。このことは、商業都市ライブツィヒで教養市民層と富裕な商人が重要な文化事業である演奏会創始に関わっていたという興味深い事実を示してくれる。商人たちはまさに次第に力をつけていく最中にあつたのである。

むろんゲヴァントハウスでは、大規模な器楽作品も多く演奏されていた。しかし初期のコンセール・スピリチュエルに倣い¹²⁾、キリスト教歴の節々の待降節や四旬節の時期にはオラトリオ、ミサ曲、レクイエム、カンタータなどの宗教曲を、そして枝の主日(復活祭の直前の日曜日)には受難オラトリオを演奏し、1830年からは「貧しい人のための慈善演奏会」と名を変えて、その後15年間続くことになった。ここではグラウン Carl Heinrich Graun (1703/04–1759) の《イエスの死 Tod Jesu》やハイドンの《十字架上のキリストの七つの言葉 Die sieben letzten Worte unseres Erlösers am Kreuze》(Hob. XX/2, 1794) などが演奏されている。またそれと同時に「オーケストラの年金基金のための慈善演奏会」も行われた。表1にあるように、ゲヴァントハウスの慈善演奏会の曲目は、ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685–1759) から同時代の作曲家までの、オラトリオやレクイエムなど比較的大きな規模の宗教曲であった¹³⁾。この中でもヘンデルの《エジプトのイスラエル人 Israel in Egypt》(1739) の演奏においては、メンデルスゾーン Felix Mendelssohn (1809–1847) の指揮で250人あまりの合唱で演奏され、そこにはプロの歌手のみでなく、市民のディレクターが演奏に参加していた。これらは、教会の教会歴によった礼拝のための音楽ではなく、市が主催したものであり、教会音楽としてではなくステージ上の宗教音楽の演奏会であった。市民はそこでは宗教的気分と知的な雰囲気の間を味わうことができ、またその

表1 ゲヴァントハウスの慈善演奏会のレパートリー (1815–47年)

| 演奏年 | 作曲家 | 作品 |
|------|-------------|--|
| 1815 | Händel | Oratorium "Messias" |
| | Schneider | Kyrie, Gloria |
| 1816 | Mozart | Requiem |
| 1817 | Händel | Oratorium "Messias" |
| 1818 | Got. Weber | Requiem |
| | Schicht | Hymne |
| | Schneider | Messe |
| 1819 | Graun | Oratorium "Tod Jesu" |
| | Händel | Oratorium "Judus Macabeus" |
| 1821 | Beethoven | Oratorium "Christus am Ölberge" |
| | Schicht | Passion "Die letzten Stunden der Erlösers" |
| 1822 | Stadler | Oratorium "Die Befreiung Jerusalems" |
| | Schneider | Kantate "Totenfeier" |
| 1823 | Mozart | Requiem |
| | Schneider | Kantate "Jehovas ist Erd" |
| 1824 | Haydn | Oratorium "Die Schöpfung" |
| | Schneider | Oratorium "Die große Flut" |
| 1825 | Neukom | Kantate "Der Ostermorgen" |
| 1826 | Drobisch | 宗教劇 "Bonifacius, der Apostel der Deutschen" |
| | Schneider | Oratorium "Das verlorene Paradies" |
| 1827 | Spoehr | Oratorium "Die letzten Dinge" |
| 1828 | Beethoven | Oratorium "Christus am Ölberge" |
| 1829 | Mozart | Requiem |
| | Naumann | Pilgerlied |
| | Schneider | Oratorium "Pharato" |
| 1830 | Händel | Oratorium "Samson" |
| | Pedroso | "Kein Auge soll sich feuchten" (器楽曲) |
| 1831 | Mozart | Requiem |
| 1834 | Cherubini | Missa solemnis No. 4 |
| 1835 | Haydn | "Der Herbst" und "Winter" aus Oratorium "Die Jahreszeiten" |
| 1836 | Händel | Oratorium "Israel in Egypt" |
| 1838 | Mendelssohn | Psalms Nr. 42, Nr. 115 |
| 1839 | Mendelssohn | Psalms Nr. 95 |
| | Mendelssohn | Hymne "Lass', O Herr, Mich Hilfe Finden" |
| 1841 | Hiller | Oratorium "Die Zerstörung Jerusalems" |
| | Mendelssohn | Psalms Nr. 95 |
| 1844 | Hiller | Oratorium "Die Zerstörung Jerusalems" |
| 1845 | Schneider | Oratorium "Das Weltgericht" (作品の25周年記念) |
| 1847 | Mendelssohn | Oratorium "Elias" |

Manuel de Moraes Pedroso (1750–1770)

Johann Wilhelm Stadler (1747–1819)

内容によっては場合によっては望んで教化された。そのように時代が進むと、市民レベルの音楽参加がますます盛んになっていったのである。メンデルスゾーンが指揮者・監督として活躍していたことも、レベルの高い合唱団を保つのに一役買っていたことであろう。そのように教会でのゲヴァントハウスやさまざまな場で市民たちは、活発に音楽を受容し始め、単に演奏会に出かけるだけでは、満足しきれなくなり、自らが演奏する側になっていったのである。

3. 市民の合唱活動

このような教会主宰でもなく、またゲヴァントハウスにおけるようなプロの団体でもない、音楽を職業に

はしていない者たちが、聴衆としてだけでなく、演奏者として、この都市の重要な音楽の場に積極的に参加するようになってきていた。その主な場が合唱協会である。表2は19世紀前半にライプツィヒで創立さ

れた合唱協会とその活動内容をまとめたものである。以下に各々の協会の成立経緯と活動内容をみていくことにする。

表2 ライプツィヒの合唱団体(1802-64)

| 創立年 | 創立者 | 名称 | 活動内容, メンバー | レパートリー |
|----------|-------------|---|---|--|
| 1802 | Schicht | Singakademie | 音楽が主目的: 音楽能力や出自が問われる。 | 宗教作品のみ演奏。表3, 表4参照。 |
| 1805 | Riem | Zweite Singakademie | | |
| 1811 | Riem | Dritte Singakademie | | |
| 1815 | | Liedertafel* | 社交を重視する男声合唱団。歌曲集の充実。 | シュナイダー, シュルツ, フィンク, ロホリッツ, メンデルスゾーン, オットー Franz Otto (1809-1842), ウェーバー, サリエリ, ウェルナー Gregor Joseph Werner (1693-1766), シューベルト, ツェルナーの作品。民謡。(本文第3章参照) |
| 1817 | Schulz | 二つの Singakademie を統合。 | | |
| 1819 | | Musikverein | 合唱と器楽を両方演奏。 | モーツァルトの《コシ・ファン・トゥッテ Cosi fan tutte》表5参照。 |
| 1822-24 | | Sängerverin "Paulus" * | メンバーは神学科の学生で、礼拝における演奏を課され、大学の祝日でも演奏していた。 | |
| 1828 | Wagner | Tuunel über der Pleiße (Sontagsgesellschaft des Peters) | 秘密結社的なグループで、毎週あやしげな宿屋に集まり、ティル・オイレンシュビーゲルを守護聖人とした。文学者、書籍商人、指揮者、楽譜出版者、著作家、『AMZ』の編集者、帯職人、役者、歌手、鍛冶屋、音楽監督、商人、医者、説教者、大学教授等。 | マルシュナーの作品。 |
| 1829 | | Musikverein "Orpheus" | 音楽の基礎知識と歌唱能力が必要。メンバー数は1834年17, 1835年24, 1838年に70, 1845年に71。 | |
| 1829 | | Musikverein (1833 まで) | ピアノ伴奏付き合唱団。 | |
| 1830 | | Zittauer Sängerverein* | ギウムナジウムの学生の合唱団から始まり、公開演奏会のみに参加。1850年にパウリナ教会合唱隊に合併。 | |
| 1831 | Zöllner | Zöllner-Verein* | ドイツの国民教育に役立てるための、新しい教育的な作品を演奏。 | ツェルナーの《粉挽き歌 Mül 1 erlieder》, ケルビーニの《レクイエム》, ベートーヴェンの《フィデリオ》, 《かんらん山上のキリスト》など。 |
| 1833 | | 第2 Zöllner-Verein* | メンバー数は12~16人に限定。 | |
| 1838 | | 第3 Zöllner-Verein* | | |
| 1838 | Petschke | 第2 Liedertafel | 創立時に25人のメンバー(弁護士, 書籍商, 法律家, 神学校受験者, 学生等), 1844年51, 1847年82。 | |
| 1842 | | Schochsche Verein | 遠足, 創立記念祭, クリスマスプレゼントなどの「社交の楽しみ」が重要。若い商人からなる。 | クーラウ Friedrich Kuhlau (1786-1832) の《すべての山の頂きに Über allen Gipfeln》 |
| 1842 | | Quartettverein* | 手工業者, リトグラファー, 鉄道就労者 | |
| 1845 | | Schochsche Verein と Quartettverein 統合→ Gesangverein "Odeon" | メンバー22人。 | |
| 1845 | | Gesellen-Gesangverein | 職人のフェライン。44人で始まる。 | 青年歌ではなく、男声四声の合唱曲を歌うという趣旨をもっていた。 |
| 1846 | Mendelssohn | Liederkrantz | 地位の高い紳士淑女が月に一度大きなホールで演奏。歌唱技術に重きを置く。 | |
| 1846頃 | | Philharmonie-Gesangverein | | ヴェーバー《魔弾の射手 Der Freischütz》 |
| 1846(47) | | Ossian | 歌唱技術が高い。 | |

| | | | |
|---------|--|---|-----------------------------|
| 1848 | | Kunst-Gewerbevereins | 手工業者のフェライン。 |
| 1849-54 | | Kunst-Gewerbeverein が分派して Gesellen-Gesangverein に。後に Zöllners Mittwochverein。 | |
| 1851-58 | | 二つの Zöllner-verein 統合。 | |
| 1860 | | Gesellenverein, Zöllners Mittwochverein と der Jüngste Zöllner-Verein が統合。 | |
| 1860 | | Zöllner-Bund に 20 団体加盟 | 338 人が集まった 20 団体の男声合唱フェライン。 |
| 1864 | | Allgemeiner deutscher Gäsangerbund に Leipziger Gäsangerbund 加盟。 | |

※*印は男声合唱協会。

3. 1. 「ジングアカデミー Singakademie」

ベルリンではすでに 1790 年に「ジングアカデミー」の前身の「ジングフェライン Singverein」が創設され、王立アカデミーで練習を行ない、活発に活動を行うようになっていた。それを受け 1802 年にライプツィヒでも、富裕な商人のリンプルガー Jakob Bernhard Limburger の提案で、ゲヴァントハウスの音楽監督でトマス・カントルも務めたシヒトを中心に「ジングアカデミー」が創立された。1827 年にはゲヴァントハウスの音楽監督であるポーレンツ Christian August Pohlenz (1790-1847, 在 1827-1835) が指揮者になり、同年彼は「ジングアカデミー」, 「ムジークフェライン」, そして宗教曲専門の男声合唱団である「パウリーナ教会合唱隊 Pauliner」と合同の宗教曲演奏会を行ない¹⁴⁾, これ以降パウリーナ教会における聖金曜日の午後には、ポーレンツの「ジングアカデミー」定例演奏会が行われるようになった¹⁵⁾。表 3 は 1815~20 年の宗教曲の演奏曲目である。最も古いレパートリーでは、パレストリーナの曲を演奏しており、古楽に注目していることがわかる。またポーレンツの定例演奏会の曲目は表 4 に示した通りで、ここでもゲヴァントハウスのレパートリーと同じくヘンデルから同時代までの作曲家の曲目が並んでいる。これらから「ジングアカデミー」が、高いレベルの作品を演奏する技術を実現することのできる団体であり、それはゲヴァントハウスの音楽監督らのハイレベルの指導のもとで育まれたことがわかる。

1805 年にはオルガン奏者のリーム Wilhelm Friedrich Riem (1779-1859) も「第 2 ジングアカデミー」を創り、ゲヴァントハウスの音楽監督シュルツ Johann Abraham Peter Schulz (1747-1800) がそれを引き継いでいる。1811 年にリームは「第 3 ジングアカデミー」も作ったが 1814 年に解散し、1817 年に 2 つの「ジングアカデミー」は約 150 人のメンバーを集め一つに統合されている。ここで注目すべきは、メンバーには、基礎的音楽知識、すなわち音部記号、音符、拍子、調性のみならず、すでにある程度修練された声、正しい

表 3 「ジングアカデミー」の宗教曲演奏曲目

| 演奏年 | 作曲者 | 曲名 |
|------|-------------------------------|--|
| 1815 | Mozart Palestrina Bergt | Hymn "Gottheit, dir sei Preis und Ehre" "Salvum fac regem" Lied für Chor |
| 1818 | Weber Schulz Mozart | Jubelkantate "Salvum fac regem" Hymn D-dur |
| 1820 | Haydn | Oratorium "Die Schöpfung" |

表 4 ポーレンツ「ジングアカデミー」定例演奏会の演奏曲目

| 年 | 作曲者 | 曲目 |
|------|-----------|--|
| 1829 | Schneider | Oratorium "Pharato" |
| 1830 | Händel | Oratorium "Samson" |
| 1831 | Schicht | Oratorium "Ende des Gerechten" |
| 1832 | Haydn | Oratorium "Die Schöpfung" |
| 1833 | Händel | Oratorium "Samson" |
| 1834 | Beethoven | Oratorium "Christus am Ölberge" |
| 1835 | Schneider | Oratorium "Das Weltgericht" |
| 1836 | Mozart | Kantate "Davidde penitente" |
| 1837 | Neukom | Oratorium "Christi Grablegung" |
| 1838 | Mozart | Requiem |
| 1839 | Händel | Oratorium "Samson" |
| 1840 | Schneider | Passionsoratorium "Gessemene und Golgotha" |
| 1841 | Cherubini | Requiem |
| 1842 | Mozart | Kantate "Davidde penitente" |
| 1843 | Schicht | "Ende des Gerechten" |

聴音力、新曲視唱能力などの音楽能力が必要とされ¹⁶⁾, またライプツィヒの上流の高貴な家庭の紳士淑女であり、有能な指揮者のもとで「まじめで高尚な歌」、とりわけ宗教作品に専念することが要求されていたことである¹⁷⁾。また上述したように、1827~43 年のゲヴァントハウスの監督であったポーレンツが指揮していたこともあり、半ば付属合唱団のごとくゲヴァントハウスにおける宗教曲の演奏に参加していたと考えることができる。

3. 2. 「ムジークフェライン Musikverein」

1819 年には声楽と器楽の両方を演奏する「ムジークフェライン」が登場し¹⁸⁾, 1828 年にはピアノ伴奏のみをもつ「ムジークフェライン」もできている。同年にはモーツァルトの《コシ・ファン・トゥッテ Cosi

表5 「ムジークフェライン」の宗教曲の演奏曲目

| 演奏年 | 作曲者 | 曲 目 |
|-----------|---------|--|
| 1823 | Naumann | Kantate "Vater Unser" |
| 1825 聖金曜日 | Händel | Oratorium "Messias" (慈善目的, トーマス教会) |
| 1826 | Mozart | Requiem (パウリーナ教会) |
| | Gallus* | "Ecce quomodo moritur Justus" |
| 1827 聖金曜日 | Mozart | Requiem |
| | Eibler | Krönungsmesse |
| | Haydn | Oratorium "Die Schöpfung" (慈善目的, ボーレンツ指揮「ジングアカデミー」と共演) |
| 1828 | Spoehr | Oratorium "Die letzten Dinge" |
| | Naumann | Pilgerlied |

*Joannes Gallus (mid.16th century)

fan tutte》(K 588, 1789-90)を演奏しているが、1833年には解散している。しかしその間にも1829年には男性9人と女性3人が再び新しい「ムジークフェライン《オルフェウス Orpheus》」を創った。この「フェライン」に新しく入る者もまた音楽の基礎知識と歌唱能力を必要とされた。また「ジングアカデミー」の設立にも関わったリンブルガーが1836-47年には責任者となり、この時期は、メンバー数が1834年の17人から、1835年に24人、1838年に70人、1845年に71人と増えており、《オルフェウス》の黄金期であった。「ムジークフェライン」のレパートリーは表5に見られるように「ジングアカデミー」にも劣らず大規模な曲を演奏している¹⁹⁾。

その他に歌唱技術に重きを置く団体には、1846年にメンデルスゾーンが設立し、社会的地位の高い男女が月に一度演奏し、そして晩餐も取っていた混声合唱団「リーダークランツ Liederkrantz」, 1846 (1847?)年に成立した混声合唱団「オシアン Ossian」もあった。

3. 3. 男声合唱協会「ライプツィヒ・リーダーターフェル Leipziger Liedertafel」

しかしこの時期にはとりわけ男声合唱協会のめざましい活躍が見逃せない。ベルリンではすでに1809年にツェルター Carl Friedrich Zelter (1758-1832)の提案で詩人と作曲家の男声合唱協会「リーダーターフェル」が設立され、1ヶ月毎に食事集まり、メンバーは自作の詩や曲を演奏した。1年後の1810年にはチューリヒのネーゲリ Georg Nägeli (1773-1836)による「男声合唱協会 Männergesangverein」も作られている²⁰⁾。これらに共通しているのは、男声合唱であること、そしてジングアカデミーに比較すると、歌唱技術よりも社交に重きが置かれることである。

ライプツィヒでは1815年に「リーダーターフェル」が設立されている。メンバーは月に1回集まり、詩的

で音楽的なリート芸術において三・四声部の男声合唱を演奏し、音楽について語り、「食卓」を意味するターフェルの名の由来通り、食事を取った。すなわちここは音楽のみに専念するのではなく、華々しい社交の場でもあった。メンバーは夕方に集まり、まず茶を飲み、それから前回の集会記録が読み上げられ、新しい曲を受け入れるにあたっての討議と秘密投票が行なわれる。夜9時の食事には歌曲集の中から曲が歌われる。また夏期の「リーダーターフェル」は、メンバーの避暑地で行われ、クリスマスやさまざまな祝日も「リーダーターフェル」にとって打ってつけの機会となった。創立記念祭においては女性も招待されている。メンバーはともに歌い、悲しみや喜びを分かちあうような雰囲気もあった。しかしその家族のような雰囲気を分かち合う仲間の社交の場である一方、限られた者のみが参加できる閉じた組織であった。すなわち、メンバー数はそれぞれの声部に3人ずつで12人に制限されており、彼らは音楽的教養に恵まれ、自ら詩や音楽も作れる上に品行方正で社交に長けた者であることが望まれた²¹⁾。この「リーダーターフェル」の25年記念祭に当たる1840年に、メンデルスゾーンは《Sechs Lied für 4 Männerstimmen》(op. 50)をこの祝祭に捧げている。しかしこの祝祭の後に「リーダーターフェル」は次第に衰退していくことになる。

また「リーダーターフェル」では1836年に、投票で決定された曲を収めた歌曲集『ライプツィヒ・リーダーターフェル歌集 Gesänge des Liedertafel zu Leipzig』が出されている。この中にはトーマス教会のオルガン奏者のシュナイダー Friedrich Schneider (1786-1853)の32曲、ゲヴァントハウスの音楽監督シュルツの25曲、音楽評論家フィンク Gottfried Wilhelm Fink (1783-1846)の25曲、宮廷顧問口ホリッツの18曲、そしてその他には商人の16曲、哲学教授の15曲、教会役員試補の15曲、書籍商の11曲、銀行家の3曲、弁護士の2曲が収められている。そして

主に外国人作曲家を集めた外国作品集の「Fremdenbuch」には、クロイツァー Konradin Kreutzer (1780–1849)、オットー Franz Otto (1809–1842)、ヴェーバー Carl Maria von Weber (1786–1826)、サリエリ Antonio Salieri (1750–1825)、ヴェルナー Gregor Joseph Werner (1693–1766)、シュューベルト Franz Schubert (1797–1828)、「ツェルナーフェライン Zöllner-Verein」の創始者ツェルナー Karl Friedrich Zöllner (1800–1860)、上述のシュナイダーの作品、そして民謡からも取り入れられている²²⁾。すなわち「ジングアカデミー」に比較すると、易しく、同時代の作品、メンバーの作品が多い。

また1822年に、学生のサークルから出発した合唱協会が、トマス・カントルのシヒトとパウリーナ教会のオルガン奏者のヴァーグナー Gothelf Traugott Wagner (1779–1832)の指揮のもとで、男声合唱協会「ゼンガーフェライン Sängerverein 《パウルス Paulus》」となって創立された。メンバーは神学科の学生で、礼拝における演奏を課され、大学の祝日でも演奏し、この頃は「トマス教会合唱隊」より力を発揮していた。

さらに1838年「第2リーダーターフェル」が創立された。「第2リーダーターフェル」も音楽的教養が必要とされたが、以前のものほど排他的ではなかった。12年もの間ベチュケ Hermann Theobald Petschke (1806–88)が指揮を務め、音楽技術を高めた。創立当時に25人のメンバーの中には弁護士、書籍商、法律家、神学校受験者、学生等があり、メンバーは1844年には51人、1847年には82人にのぼり、このフェラインは、入場料を取る演奏会を行わず、四半期集会と創立記念祭でも聴衆は招待という閉鎖的な形を取っていたのが特徴的である。

3. 4. 教育的団体「ツェルナーフェライン Zöllner-Verein」

また、音楽を主目的に受容する団体や男声合唱のむしろ娯楽に偏ったサークル以外に、教育的な目的を強くもつ団体も生まれている。トマス教会でかつてシヒトの生徒であったツェルナーがその中心人物である。彼は音楽教師、作曲家として活動しており、ドイツ民族の基礎教育に役立つような、新しい教化的作品、すなわち小さいサークルのみに通用するような曲ではなく、民族に浸透し、皆の共通財産となるようなものを目指し作曲していた。ツェルナーはそのような理念のもと、フォルクスシューレの若者のために歌曲

を書き、音楽学校を創立し、市立自由学校 Ratsfreischule の少女たちに日曜日に自宅で歌の授業を行なった。そこで彼はまさに市民の音楽教育者という自覚をもっていた。彼は1830年頃から混声や男声四部の曲を書いており、ゲヴァントハウスの音楽監督のシュルツ家で祝われたツェルナーの誕生日に歌われたその作品の内容に感動した歌い手たちが、その練習の継続をもちかけ、それが毎日曜日に集まる運びとなった。それが1831年の「ツェルナーフェライン Zöllner-Verein」創立の発端であった。

またこのフェラインから独立して1840年には、メンバー数が規約によって12~16人と決められた「第2ツェルナーフェライン」が発足している。しかし1851年には最初の「ツェルナーフェライン」に合併され、1858年には解散した。

1846年には「第2ツェルナーフェライン」と「フィルハーモニー・ゲザングフェライン Philharmonie-Gesangverein」が男声合唱の二大フェラインとなっていた。この二つはオーケストラの伴奏で多くの演奏会を行っており、ゲヴァントハウスの指揮者であったメンデルスゾーンやガーデ Niels Wilhelm Gade (1817–1890)はこれらの小さな演奏会に自分の曲を持参し、ツェルナーの《粉挽き歌 Müllerlieder》も連続演奏会ですべて歌われている。その他ケルビーニの《レクイエム Requiem》(1816)、ベートーヴェンの《フィデリオ Fidelio》(op. 72, 1804–05)と《かんらん山上のキリスト Christus am Ölberge》(op. 85, 1804)も演奏されている。「フィルハーモニー・ゲザングフェライン」は、ヴェーバーの《魔弾の射手 Der Freischütz》(op. 77, 1817–20)の演奏、オイテルペの演奏会への参加や、独自の公開演奏会など活発な活動を行っている。

3. 5. 手工業者の団体

また、より「低次の」市民の合唱協会も1840年代以降にできている。それは、1842年に創立した主に若い商人から成る「シヨッホ・フェライン Schochsche Verein」、もう一つは手工業者、リトグラファー、そして鉄道就労者から成る「カルテットフェライン Quartettverein」²³⁾、1845年に指揮者ツェルナーのもとで職人が男声四部の合唱曲を歌うという趣旨をもって44人で始まった「職人ゲザングフェライン Gesellen-Gesangverein」、そして1848年に創立された「工芸フェライン Kunst-Gewerbeverein」が創立されている。ここでは「音楽の楽しみ」以外に、遠足、創立記念

祭、クリスマスプレゼントなどの「社交の楽しみ」が重視された。

この「工芸フェライン」は1849年以降「職人フェライン Gesellenverein」,そして「ツェルナー・水曜フェライン Zöllners Mittwochverein」と名を変え、かつての市立自由学校の生徒がメンバーであった「第3ツェルナーフェライン der Jüngste Zöllner-Verein」とともに、1860年ツェルナーが亡くなった際に1つに統合された。また1860年には、338人が集まった20団体の男声合唱フェラインによって「ツェルナー連盟 Zöllner-Bund」が設立されている。

3.6. それ以外の団体

また音楽芸術を主目的とする正規の合唱協会だけでなく、秘密結社的な内容をもつ団体も創立している。当時のウィーンの「Wiener Ludlamshöhle (ウィーン・ルートラム洞窟)」とベルリンの「Tunnel über der Spree (シュプレー川の向こうのトンネル)」に倣い、ライプツィヒでも1828年創立された「Tunnel über der Pleiße (プライセ川の向こうのトンネル)」別号「Sonntagsgesellschaft des Peters (ペーター日曜協会)」である。これは、最初は2人のメンバーから始まった、閉鎖的で秘密結社的なグループであり、毎週あやしげな宿屋に集まり、ティル・オイレンシュピーゲルを守護聖人とし、「ユーモアがあり、ばかげた」ことを楽しんでいた。例えばあらゆる概念は「良い」は「悪い」、「長い」は「短い」という具合に裏腹にみなされるのである。メンバーには文学者と書籍商人が多く、その各々は「かみくず Makulatur」とされ、あだ名もっていた。メンバーにはその他にも、指揮者、楽譜出版者、作家、『AMZ』の編集者フィンク、大学教授、説教者、音楽監督、商人、医者、簿職人、鍛冶屋、役者、歌手等がいる。マルシュナー Heinrich Marschner (1795-1861)もこの団体のために男声四声の合唱曲をつくっただけでなく、その指揮者になったことから、この団体はリーダーターフェルへの道を歩むことになった。しかし1831年にマルシュナーがライプツィヒを去り、この「トンネル」は音楽的意義を失い、単なる娯楽サークルとなってしまった。

このようにライプツィヒでは多数の市民の合唱組織が存在しており、1868年には10の合唱協会、36の男声合唱協会が存在していた。元来ドイツのテューリンゲン地方やザクセン地方では音楽が活発であったが、この地方においては20年代から合唱祭 Sängerkulte が発達し、男声合唱があちこちに普及すると「民族の祭

典 Volksfeste」として大きなものになり、国民はそれに熱狂したのである²⁴。そしてドイツの他地域で行われる祭典にもライプツィヒの諸フェラインは参加していたのである。また1864年には「ライプツィヒ合唱連盟 Leipziger Gäsangerbund」が「ドイツ合唱連盟 Allgemeiner deutscher Gäsangerbund」に加盟している。

これまでみてきた合唱協会は大きく分けると異なった6つのタイプがある。1つは、「ジングアカデミー」のように、表3や表4にみられるような技術的に難しい曲——歴史主義的な思想のもとに古楽曲や宗教曲のレパートリーも含めて——を演奏したり、また会員にも階級的にも技術的にも高度な条件をつけたりする点で、高いレベルの教養が必須であった混声合唱団であったと考えられる。これはロンドンの古楽演奏の協会やベートーヴェンのみの演奏を行う協会や²⁵、また古楽のレパートリーを広く扱うカッセルの「チェチリア協会」においてと同様であり、多くの都市で最も特権的であった。また2つ目は、器楽と声楽が合同で演奏するもので、ここでも比較的大きな宗教作品を演奏していた。3つ目は、「リーダーターフェル」のように、やや社交に重きを置き、同時代のドイツの作曲家や指揮者の作曲した作品などを演奏している男声の合唱協会である。彼らは仲間の絆を重用視していた。4つ目は、ドイツの国民教育をも目指すような、音楽教育を目的とする「ツェルナーフェライン」のような団体である。そして、5つ目が手工業者の団体で、彼らはライプツィヒにおいては、4つ目の団体と統合することになる。6つ目が秘密結社的な娯楽が主目的の団体である。それらはときに共存しながら、時代を下るにつれて音楽のレベルを下げていったことは明らかであり、素人が参加し易いものになっていることがわかる。そして当初は音楽が主目的であったが、その娯楽目的が増え、教育への利用や、そして職業意識を高めるために、ドイツ国家の国民としての意識を高める道具としても役割さえ果たすようになっていった。

おわりに：

合唱協会の変遷にみられる市民の重層化

この19世紀前半は、人々の教養の享受方法において自発性が顕著にみえてくる時期である。それまで教養を享受していたのは主に貴族であり、彼らの間でも音楽は学ぶべきそして愛好すべき対象であった。しかし貴族の音楽実践は社会の大勢を大きく動かす活動力ではない。市民がその中心になったときに、プロの音

楽家の監督下で多くの人々が共通して体験できる音楽実践が、合唱という形態であった。そうして合唱を始めたばかりの彼らは、専ら宗教曲に専念した。そしてこの宗教曲が教会の外で演奏されることで、女人禁制のしほりはなくなり、受容可能な層はますます厚くなった。そしてとりわけパレストリーナなどの過去の宗教曲を演奏することは、ロマン主義の中で遠い過去を想起させ、聖なる気分を味わうことができ、また当時の歴史主義ともあいまって過去を認識する知的な対象にもなったのである。とはいえ彼らは市民の中でも上層の一部であり、たしかな音楽技術が必要とされた。ライブツィヒにおいても市民が宗教音楽にあくなく興味をもったのは、トーマス教会という伝統の中で育まれていた宗教作品のもつ知的な産物を欲していたからだった。そして確かに「ジングアカデミー」は、音楽的に高い教養をもつ者が芸術家と組んで結成したものであり、宗教曲の演奏を行なうなどエリート意識ももってはいた。またそこに排他的な面がありながらも、一定のレベルを保つことができたのは、ゲヴァントハウスやトーマス教会の監督や指揮者といったレベルの高い指導者が常にそばにいたからである。また音楽誌の批評家のロホリッツやフィンクラの音楽を読むことのできる知識にして供給してくれたディレクタントの活動も、市民の教養への熱望に一役買った²⁶⁾。

ここで表2を今一度みることにする。毎年のように、次々と合唱団が創立されているが、その内容は、年代に沿って刻々と変化もしている。前章に述べたように、異なったタイプの合唱協会が共存もしているが、合唱音楽は、市民でも身分の高い者や大学生の特権的な教養であったのが、メンバーはしだいに教育されるべき子供たちや手工業者などの下層市民にまで浸透し、合唱協会の質そのものが落ち、教養市民層の特権的・排他的活動の対象ではなくなっていた²⁷⁾。レパートリーも、古楽のポリフォニーや宗教作品など技術的に難しいものから、次第に同時代の作曲家や自らが所属する合唱協会のメンバーの曲になっていき、合唱協会は誰もが参加できる大衆化されたものになっていった。すなわち時代が下り、市民が重層化していくにつれ、下層の市民が求めた教養音楽は、高い芸術的素養をもつエリート層の市民がそれまで享受していた音楽教養とは異なってしまったのである。それは、彼らが教養を欲しなくなったというより、むしろ合唱協会に参加し、何らかの歌を演奏することのみが彼らの欲する「教養」になってしまったかのようにみえる。むしろ19世紀に教養身分が「読み書きする公衆」か

ら「大学教育を受けた者」に変化しており²⁸⁾、それによって生まれた高級官吏の上層部は、学問的教養を身につけていない「民衆」とは区別されるようになった²⁹⁾。そして教養市民は日常の実利的な世界からは離反していき、コンサートの聴衆としても社交の場としてそれを楽しむのではなく、次第に真面目に音楽に集中して聴くようになり³⁰⁾、特殊なレパートリーに凝ることになる。しかし逆に民衆もしくはそれに近い幅広い層は、娯楽音楽に興じ、合唱協会においてはもはや本来の教養は見失われようとしていた。これは、現代の日本において多数のアマチュア合唱団が抱える問題とも関連しているであろう。

本稿では、ライブツィヒ市民の音楽活動をその合唱協会の活動内容からみてきた。彼らの活動は一括りにすることができないほど、多様であった。しかし多様なものが同時に常に存在していたのではなく、むしろ歴史的に市民の教養のありかたを変化させていったとみられる。すなわち特権的な知的教養が一部の市民を「貴族化」させた一方、教養は下層に広まるにしがたがってしだいに大衆化されたものになり、合唱は皆が安易に手に入る「お安いもの」になってしまったのだ。そしてその後教養市民の階層化がいつそう進んでいった。

このような合唱協会の成立や展開の仕方は多くのドイツの都市で似通っているところもあろう³¹⁾。しかしまたライブツィヒにおいては、ゲヴァントハウスでの演奏会や見本市での演奏会のために外から入ってくる音楽や音楽家との接触や、音楽誌の批評家により、常に観察の目にさらされ刺激を受けていたのである。今後そのような他都市との比較においてより詳細な分析・考察をし、ライブツィヒの特徴や市民の教養へのありかたをさらに明らかにし、また現在日本の合唱団のありかたにも目を向けていきたい。

注

- 1) 「プロイセン一般ラント法」は1746年フリードリヒ大王の勅令によって試みられた、啓蒙主義思の所産であり自然法の成分化されたものであった。
- 2) 玉川 1991: 107頁。
- 3) 野田 1997: 20頁。
- 4) 読書熱の高まりから、書籍店が建ち並び、また娯楽文学のポケット文庫本の貸し出し文庫数も1815年には6、1820年には10、1840年には16、1845年には24にまでなっている。in: Schmidt 1912: 6.
- 5) 18世紀に「美術友の会 *Kunstsocietät*」をはじめ多くの美術協会が発足し、美術の歴史や保存のために活発に活動していた。

- 6) ライプツィヒでは13, 次いでウィーンが12, ベルリン9, マインツ5などとなっている。Schmidt op. cit. 参照。
- 7) 彼の息子のヴィルヘルム Wilhelm Friedemann Bach (1710-1784) やクリストフ Johann Christoph Friedrich Bach (1732-1795) なども、宮廷や教会に勤める音楽家ではあったが、その一方大学で法律の勉強をしはじめており、教養市民の仲間入りを果たしていた。
- 8) 当時のカントル、クーナウはそのような経緯から1720年に議会にコレギウム・ムシクムに対する抗議文を発表し、教会での演奏権を回復したのであった。
- 9) そのような市民の演奏にはそれ以前に下地があった。すなわち18世紀後半にヒラーが創立した「音楽協会 Musikverein」の「演奏会協会 Konzertgesellschaft」があった。そこでは主に器楽が演奏されていた。
- 10) 白鳥館で行われていた「大演奏会 Großkonzert」はそれが行われる建物の名にちなんで次第に「ゲヴァントハウス演奏会」と呼ばれるようになった。それまでも、専ら教養人と身分の高い者のサークルや、コレギウム・ムシクム、主にディレクターが器楽の演奏をしたヒラーの「音楽演奏協会」などがあった。
- 11) Schmidt op. cit.: 94.
- 12) コンセール・スピリテュエル concert spirituel は1725年にアンヌ・ダンカン・フィリドールによって設立された演奏会で、フランス革命中の1791年まで続けられた初期の公開演奏会。《スピリテュエル》という名称が示すように、最初はオペラが上演されない四旬節の期間に、オーケストラと合唱による宗教的作品と器楽作品を上演していた。
- 13) 本論中に示される表はすべて、Schmidt の資料から著者がまとめたものである。
- 14) またこの「パウリーナ教会合唱隊」は、1836年にはオイテルベの演奏会(ゲヴァントハウスの控えの間で行われた小規模な演奏会)、そして1837年「ムジークフェライン《オルフェウス》」の演奏会でも歌うなど、大きな声楽作品が演奏されるときにはいつもエキストラとして駆りだされている。
- 15) Schmidt op. cit.: 33. 1843年のポーレンツの死後、指揮者がリヒター E. F. Richter に代わったが、聖曜日の習慣はそのまま保たれた。
- 16) Schmidt op. cit.: 142.
- 17) 19世紀前半のカッセルにおける、シュポアが創立した「チェチリア協会」の規約には、会の閉鎖性はみられるが、これほど細かい歌唱技術に関する規定はない。[三島 1997] 参照。
- 18) ムジークフェラインはもともと器楽を奏する団体を指している。
- 19) Schmidt op. cit.: 30 ff.
- 20) ペスタロッチの教育哲学に基づいた、自然な感性と自発性を基調とした独自の音楽教育感をもつネーグりは1812年に合唱の効用を説いている。「限られた人達だけが高級な芸術を実践するのではなく、高級な芸術が民衆の、国家の、ひいてはヨーロッパ全体の共有財産になり、人間性自体が音楽の一要素とみなされるよ

うになって初めて、音楽の時代と呼べるものになる。そしてそれは、合唱活動を押し進めることによるのみ実現する。『持つて生まれた声は平凡なものでも、百人集まって良く訓練すれば立派な合唱団が出来上がるのだ』西原 1988: 105-106頁。

- 21) Schmidt op. cit.: 148.
- 22) Ibid.
- 23) 「ショッホ」と「カルテット」は、1845年に二つの協会がともにクーラウ Friedrich Kuhlau (1786-1832) の《すべての山の頂上に Über allen Gipfeln》を歌ったきっかけで、22人のメンバーをもつ「ゲザングフェライン《オデオン Odeon》」に統合された。
- 24) 北ドイツと中央ドイツ(ケーテン、ハレ、マグデブルグ等)においては、合唱祭は教養階級のみのための閉鎖的な社交的演奏会にとどまっていた。
- 25) 西原 1990b: 183頁。
- 26) ライプツィヒ出身ではないが、文学者シュトルムも自ら合唱の指揮を行っていた。in: 田中宏幸 1988: 57-73頁。
- 27) 職業的芸術家はこれらの合唱組織に軽蔑の念を抱いていた。メンデルスゾーンは1840年の「リーダーターフェル」25周年創立記念祭での合唱について、彼らの歌い方を非難する手紙を母や姉に書いている。
- 28) 野田 前掲書: 21頁。
- 29) 阿部 1997: 69頁。
- 30) 吉成 1990: 52頁。
- 31) [三島 1997] 参照。

参考文献

- 阿部謹也 1997『「教養」とは何か』東京: 講談社, 講談社現代新書。
- 加藤博子 1989「ライプツィヒのコレギウム・ムジクム-18世紀前半の幾つかのコレギウム・ムジクムを中心に」『音楽学』第35巻3号 181-191頁。
- 三島 郁 1993『19世紀前半のライプツィヒにおける市民社会における音楽受容』修士(教育学)学位取得論文(東京学芸大学大学院教育学研究科)
- 1997『ルイ・シュポア作品論-西洋音楽史再構築にむけて-』修士(文学)学位取得論文(大阪大学大学院文学研究科)。
- 2001『鍵盤上を飛遊する *discretion* とファンタジー -J.J. フローベルガーのチェンバロ曲にみられる表現装置-』博士(文学)学位取得論文(大阪大学大学院文学研究科)。
- 西原 稔 1987「ネーグリのバッハ研究-19世紀初期のバッハ受容の一側面-」『桐朋学園大学研究紀要』第13集 95-109頁。
- 1988「十九世紀の消費と音楽」、『ポリフォーン』第3号 東京: TBS プリタニカ 104-115頁。
- 1990a『聖なるイメージの音楽-19世紀ヨーロッパの聖と俗』東京: 音楽之友社。
- 1990b「なぜベートーヴェンは偉大なのか」、『現代思想』東京: 青土社 第18巻13号 180-191頁。
- 野田宣雄 1997『ドイツ教養市民層の歴史』東京: 講談

社，講談社学術文庫。

大崎滋生 1993『音楽演奏の歴史—よみがえる過去の音楽』東京：東京書籍。

レイノア，ヘンリー／城戸朋子訳 1990『音楽と社会—1815年から現代までの音楽の社会史』音楽之友社 (Raynor, Henry. 1975 Music & society. Since 1815. New York: A crescendo Book Taplinger Publishing. 全訳)

Schmidt, Friedrich 1912 *Das Musikleben der bürgerlichen Gesellschaft Leipzigs im Vormärz (1815–1848)*. Langen-

salza: Hermann Beyer & Söhne.

玉川裕子 1991「ゲーテにおける市民性の問題」，日本ドイツ学会編『ドイツ市民文化の光と影』東京：成文堂 105–141頁。

田中宏幸 1988「シュトルムと19世紀音楽文化」『金沢大学教養学部論集』第26巻1号 57–73頁。

吉成 順 1990「音楽の近代：自立的音楽と公開演奏会」，『UR』東京：ベヨトル工房 50–57頁。